

『東方』 二九二号より

## 「虫の眼」で見た日本

清水美和(東京新聞)

日本と中国の間柄が、どうもうまくいかない。最近では、何か日中間のトラブルが起きるたびに、お互いの民族感情が刺激され、マスコミやインターネット上で相手を敵視するような報道や意見があふれかえる。

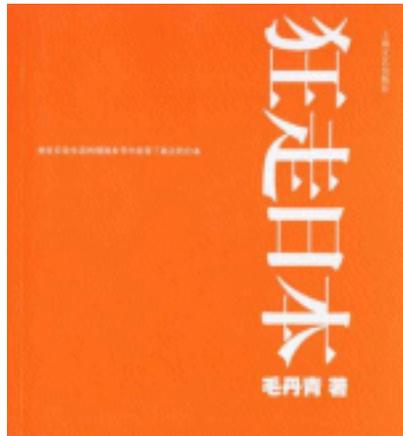
近年、中国では「都市報」と呼ばれる商業マスコミが急速に発展しているが、そこで、よく喧伝される日本人は、勃興する中国をいかに封じ込めるか、いつもアメリカと陰謀をめぐらしている。すきあらば中国の領土や領海を侵犯し、裏に回って台湾独立を画策する。

昔、毛沢東主席は日本の過去について「日本軍国主義に罪があり、人民には罪はない」と言ってくれたものだが、最近のマスコミやネットでは「人民」も許されない。政治家のみならず大衆に至るまで過去の責任を認めようとせず、政治大国から軍事大国になる夢をたくましくし、中国人に居丈高な態度を取る姿が強調される。日本人に「侮辱された」中国人と日本人のトラブルは大きく報じられる。

もつとも、こうした極端な報道や意見は中国側のみの現象ではない。日本の少なくないマスコミに現れる中国も、毎年軍事費を拡大して富国強兵を目指し、虎視眈々と海洋進出を目指し東アジアの覇権を狙っている。日本が援助しても感謝せず、過去の問題を謝っても謝っても、謝罪を要求してくる。日本にやってくる中国人に真面目な留学生が多いことは、あまり紹介されず、犯罪予備軍ばかりであるかのように描かれる。

毛丹青著  
『狂走日本』

二〇〇四年・上海文芸出版社・一、六〇六円



中国のテレビや映画に登場する日本人が常に悪辣な顔をした兵士で、いつも「メシ、メシ」「バカヤロウ」と叫んでいるといった時代があった。さすがに、そうした時は過ぎ去ったが、日本人と中国人がお互いを等身大に見るのは、まことに難しい。

いや、これだけマスコミやインターネットが発達しても、かえって偏見が増幅して実際とは似ても似つかないお互いの姿を描き出すことが横行し、それが、さらに両国の相手に対する感情を悪化させるといふ悪循環が続いている。

この点で、一九八〇年代後半から日本で暮らす毛丹青が、中国の旅行雑誌などに発信して来た記事をまとめた『狂走日本』の仕事は貴重だ。

彼が好んで使う表現である「虫の眼」で描かれた日本は、さまざまな出来事が多方面から紹介されていて一見、とらえどころがない。それぞれの挿話には日本に長く生活しながらどこか馴染み切れない中国人の感慨も込められてい

▼ 『東方』292号より  
一 「虫の眼」で見た日本  
▲ 清水 美和

クリックすると次の段にジャンプします。

る。だがそれらを、まとめて読むと、まぎれもない日本人の日常や生活が浮かび上がってくる。

しかし、彼は日本の社会を素晴らしく描いたり、日本人でも「偉人」や「友好人士」を取り上げたりすることは、まずない。いや、むしろそれとは逆で、登場人物も「偉人」とはかけ離れた存在で日中関係にも興味がない人々が多い。例えば、毛が築地の魚市場と一緒に働いていた日本人の話。彼は市場にいる時とは全く違った出で立ちで毎晩、銀座に遊びに行く。銀色の背広に身を包み、腰には黄色いベルト。毛が理由を尋ねると、「俺らは魚売りだ、いい魚をたくさん売るにはまず魚に近づかなくっちゃな」という答えが返ってきた。

実際にその上着はぴかぴかの魚の鱗で加工されており、「俺は銀座で魚先生と呼ばれているんだよ」と自慢する。銀座の晴れ舞台で彼が一番、うれしいのは魚屋と人に認められるときだ。そのために彼はその服を着る。

「俺は太刀魚だ、嘘じゃないぞ、ほら、この格好でわかるだろう」

名古屋で懇意になった和菓子職人の多和田さんの話。多和田さんは太っていてひげ面だが、くねくねと歩き、その姿は歌舞伎の女形のような。彼は「粉をこねてますから」と言い訳する。

新作和菓子の発表会で多和田さんは、粉にとつて良い温度をどうやって知るかと言われると、「私は自分でこねた粉を袋に入れて抱いて寝るんです。そうすると、その体の温度を知ることができて、その温度で作った和菓子はおいしくなります」と答えた。

毛が驚いたのは会場の反応だ。

「彼の言葉が終わると同時に会場に拍手が起こった。だれ

▶ トップページにもどる

もが彼のこれ以上ない簡潔な答えに感動していた。私の側の老人は『彼こそ匠(たくみ)だ、粉に魂を込めるとは』とうなっていた」

毛が取り上げる日本人たちは、どこか哀愁の漂う人々が多い。

毛の隣に住んでいる長谷川さんは何事にもぎつちりした人で、朝、ごみを出すときも、きちんと整頓していく。道で会うと快活に挨拶をしていたが、最近リストウされてすっかりしよぼくれてしまった。

暇になった長谷川さんは、よく自宅の庭にやって来る猫を昼間の街で見かけた。猫は通りの宝石店に入ると売りが目を離したすきにショーケースの奥に頭を突っ込んで大きな宝石を飲み込んでしまった。長谷川さんは猫の腹の中にある宝石を取り出したい、そのためにどうしても猫を殺す、と言いつくす。長谷川さんは憎々しげに言う。「野良猫は毎日あんなに悠々と生きてどんなにいいだろう。私なんか会社を辞めて年金をもらっても毎月の家のローンにも足りやしない。私は野良猫にも劣るのです」

深夜に庭で練り広げられた長谷川さんと奥さん、猫の大立ち回りが描かれる。優雅な足取りの猫に対し、蒼白の長谷川さん。一歩近づくと猫は一歩離れ、そのうち猫は草の上を猛烈に回り始める。ついに猫は草地に大量に嘔吐し、来たときと同様、悠々と立ち去る。走り寄った三人がそこに見たのは宝石ではなく小さな石ころだった。

毛は笑いをこらえるのに苦労するが、立ち去る猫に長谷川さん夫妻が取った行動は、いかにも日本人らしい。夫妻は猫が消えた方向に手を合わせ「南無阿弥陀仏」と唱えていた。

もちろん、毛は京都の美しい景色や、新幹線の「だんだん

長くなる鼻」も描き、ノーベル賞作家、大江健三郎との対話も紹介する。ただ、私が心引かれたのは先に紹介したような、一見、とりとめのない、庶民のエピソードだった。そこには、どこか滑稽でも懸命に生きている人々の姿が描かれ、それを見つめる暖かな視線も感じられる。それは、毛も、また、日本式の生活を経験したからかもしれない。毛が大阪の商社に勤めていた頃の話。接待で遅くなり終電で最寄り駅にたどり着いた後、のどを潤すため自販機で買った缶コーヒーの暖かき。飲み終えた缶を捨てようとゴミ箱を探すが見当たらない。

「石段の右側にブロック塀があった。(中略)目を凝らして見ると、塀の上に一文字の列がある。それはコーヒーの空き缶だ。缶は背の低いものから高いものまで、まっすぐに直立している。薄明るい月光の下、空き缶は没落した武士のようにも、今まさに戦場に駆けつけようとする武士のようにも見えた」

毛は思う。この缶は私と同じような気持ちの誰かが置いていったに違いない。きつと彼らも仕事から開放されて、恍惚感が何ともいえない悲哀に変わる気分を味わったことだろう。これら空き缶の屹立する雄姿を見てそんな気分を打ち消して行ったのかもしれない。毛は手の中の空き缶をその隊列の中にそつと置く。

これらのエピソードを読んだ中国の読者たちは従来の日本に対するイメージと異なるものを感じるのではないか。

他民族や異文化に触れた時、最初に感じる反発や違和感が薄れ、親しみを感じるのは、何も相手の素晴らしさを知ったときに限らない。いや、むしろ自分たちと同じように相手も悩みを抱き、それに対して一生懸命立ち向かっている姿に共感できたときかもしれない。誤解を恐れずに言

▶ トップページにもどる

えば、自分たちと同じ卑小さを見出したときでさえ親しみを感じることもある。

私自身も中国社会で長く暮らして、どうしてもなじめなかつたことがある。中国では友人や同僚と食事したり酒を酌み交わしたりするとき、とにかく相手をほめちぎり面子を立てあう。こちらまで中国人の面子を立てる必要があつたとき、自分が歯に浮くようなことを言っているように嫌だつた。しかし、それが彼らなりの生活習慣で、中国社会で人間関係や仕事を円滑に進める上で不可欠だと知つてから気にならなくなり、中国人との付き合いが億劫でなくなつた。

これは、ごく小さな例に過ぎないが、毛は一見取りとめない、日本と日本人に関するエピソードを重ねることで、自分自身が長い日本生活を通じ、鬼や蛇がすむ特別な世界ではなく、中国人にも親しめる当たり前の人間社会であることに気付いた経験を中国人読者に追体験させようとしているのではないか。

特に毛の文章とともに掲載されている中国人カメラマンたちの写真が秀逸である。取材のたびに中国から日本に呼ばれたという新鮮な眼が感じられ、あざやかな色彩の中に日本の文化や人々に対する健全な好奇心が息づいていて、これらの写真を見た人々は、きつと日本に行きたくなるだろう。

「戦争は常に政治家が始めるものであつて、一般大衆とは関係が薄い。戦争の責任は当然政治家が負うべきものであつて一般大衆は大して関係がない。(中略)私は日本人の中にも狡猾で奸智にたけたものがあることは認めるが、それは中国人のなかにも、そうした人物には事欠かないのと同じである。好くない日本人一人に出くわしたからとい

て日本民族全体を否定するのはやめたほうがいい」（莫言による序文「君は一匹の魚だ」）

毛丹青の文章とこの本に盛られた写真の数々は、この当たり前の真実を巧まずして中国の読者に伝える。毛本人は、こうした目的意識をどれほど持っていたかわからないが、この非政治的な本は複雑を極める日中関係の中にあつてキラリと光っている。

[トップページにもどる](#)